

# 古典期オスマン朝史書に見える セルジューク朝との系譜意識

小 笠 原 弘 幸

## は じ め に

所与の王朝下で著された歴史叙述において、王朝を構成する集団が、いかなる先行諸王朝の同族あるいは後裔に位置づけられるかは、しばしば切実かつ喫緊の主題をなす。それが、当該集団の持つ権威および自意識の問題と、密接に結びついている故である。13世紀末ごろ北西アナトリアに登場し、テュルク系オグズ族にその由来を持つといわれる<sup>(1)</sup>オスマン朝における歴史叙述でも、先行諸王朝との系譜関係は様々な形で繰り返し主張されたモチーフであった。オスマン朝における歴史叙述で特に強く意識されていた先行王朝は、セルジューク朝である<sup>(2)</sup>。時代的にも地理的にも、オスマン朝直近であるこの王朝は、他王朝よりもオスマン朝にとって特別な位置を占めていた。

オスマン朝と同じくオグズ族にその起源を持つとされるセルジューク朝は、11世紀に中央アジアから西アジアに侵入し、アッバース朝カリフを保護してシリア・イラクに支配権を確立した。アナトリアにもセルジューク王家の分家が進出しルーム・セルジューク朝を建国、12世紀に本家である大セルジューク朝が滅亡した後も、オスマン朝勃興前後の14世紀初頭まで命脈を保った。カリフを助け繁栄を築いたセルジューク朝の高い評価は、その後のペルシア語圏歴史叙述において継続したとされる<sup>(3)</sup>。

史実として、オスマン朝とセルジューク朝の間に、何らかの関係があったことを示す同時代史料は存在しない<sup>(4)</sup>。しかし、ルーム・

セルジューク朝が滅亡して一世紀以上経ってから書かれはじめるオスマン朝における歴史叙述では、様々な形で両者が堅固な紐帯を結んでいたことが伝えられている。なぜ史実とは異なり、両王朝の紐帯が語られているのか。この主題に関して幾つかの研究を著している Imber は、15 世紀のオスマン朝史家はセルジューク朝の権威を利用したと、簡潔だが先駆的な指摘をしている（“The Ottoman Dynastic” 14-5; *The Ottoman Empire* 122）。但し Imber が触れていない両王朝の系譜関係の主張や、16 世紀以降セルジューク朝との関係が如何に展開したかについては、なお検討の余地を残す。オスマン朝における史書のなかのセルジューク朝に関する記述の意味を十全に明らかにするには、その変容過程を更に検討する必要があるだろう。

本稿の目的は、セルジューク朝の起源および同朝との系譜意識が、オスマン朝における歴史叙述においてどのように語られ変遷したかを明らかにし、その背景を検討することである。背景の検討にあたっては、二つの焦点を設定する。一つはオスマン朝史家をとりまく政治的状況、そしてもう一つはオスマン朝における歴史叙述が受け継いだ、オスマン朝に先行するムスリム史学史の潮流である。本稿の検討によって、権威の源泉としての先行王朝との系譜関係主張のあり方、そしてオスマン人士の持っていた自意識や歴史認識の一端が明らかになると思われる。対象とするのは、オスマン朝において歴史叙述の始まる 15 世紀初頭から、オスマン朝「前期」の区切りと見なされる 16 世紀末までであり<sup>(5)</sup>、この時期に著された世界史書及びオスマン朝初期史を扱った史書を利用した。本稿で確認した史料は表に示した通りである<sup>(6)</sup>。

セルジューク朝の言説上の位置づけについては、オスマン朝研究では先に触れた Imber の一連の研究が存在するほか、イラン研究の分野においては、セルジューク朝の言説上の起源の変遷をペルシア語・アラビア語史書の記述より丁寧に読み解いた大塚、「マンズィケルトの戦い」を同時代からトルコ共和国にかけて著された歴史書がどのように取り扱っているかを跡づけた Hillenbrand の研究が、共に 2007 年に著されている。セルジューク朝がその後の歴史叙述に

おいていかに位置づけられ、それがどのような意味を持っていたのかという問題意識が、研究者の間で高まってきている。本稿は、こうした近年の研究動向に倣さすものである。

本論に入る前に、本稿で用いる概念や用語を確認しておきたい。本稿では先行王朝との「系譜意識」を扱うと先に述べたが、これは先行王朝がオスマン朝と同じオグズ族に属しているか否かという同族関係の主張や、直接的な婚姻関係、更には具体的な系図によって示された関係を含めた概念とする。また、本稿においては「オグズ族」や「クヌク氏族」等の族的集団名にしばしば言及する。「部族」や「氏族」の概念をめぐることは、近年重要な視点が提供されているが<sup>(7)</sup>、本稿においてはとりあえず族的集団とは何かという問題は捨象することとし、これらの語はあくまで15・16世紀の史料中に現れる限りにおいて、当該集団を指す文言として取り扱うに留める。なお原語は「il」「uruk」「kabile」「kavm」など様々であるが、有意味な使い分けは確認できなかったため、訳出する際は訳語を一対一対応させることなく、適宜原語を補うこととした。

## 第1章 セルジューク朝との系譜意識の強調：15世紀

知られているように、オスマン朝は13世紀末、末期のルーム・セルジューク朝が支配するアナトリアにおいて登場したとされる。しかしながら、13世紀は勿論14世紀においても、オスマン朝治下で著された歴史叙述は伝存していない。オスマン朝における歴史叙述の明確な始まりは、アンカラの戦いでティムールに壊滅的敗北を被り、その立て直しが試みられた15世紀初頭に求められる。本章では、その15世紀のオスマン朝における歴史叙述のなかでセルジューク朝との系譜意識がどのように語られていたかを、同族関係と婚姻関係に分け検討する。

### 第1節 同族関係

オスマン朝で著された史書はほぼ例外なく、オスマン集団の出自をテュルク系オグズ族として記述している。15世紀のオスマン朝の

史家達は、セルジューク朝もオグズ族、特にオグズ族を構成する24氏族のうちのクヌク氏族の出身であり、オスマン朝と近い関係にあるという主張を行っている。この主張を最も明確に示しているのは、当初からオスマン朝治下で著された史書としては現存する最古のものである<sup>(8)</sup>、ヤズジュオール・アリーによってムラト二世（位1421—44、1446—51）へ1424年に献呈された通称『セルジューク王家史』である。本書は、その内容がセルジューク朝史とイル・ハン朝史を包括したオグズ族的歴史観によって叙述されている点で、本稿の主題にとって重要である。まずここでは、本書がセルジューク王朝とそのオグズ族的歴史観の中に如何に位置づけているかを見ていきたい。

本書では、イル・ハン朝の宰相にして史家であるラシードウッディーンによる高名な世界史『集史』（1310年頃）に準じたオグズ伝承、すなわちオグズ族の伝説的な王オグズ・ハンの事績を中心とした説話が語られた後、セルジューク朝の歴史が続く。同朝の滅亡時には、オスマンがオグズ族の慣習に則って即位する逸話が語られ、オグズ族の王位がセルジューク朝からオスマン朝に移ったことが示される。話はそのままイル・ハン朝史（実質的にはガザン・ハンの事績のみを扱う）につながる。このうちセルジューク朝史が突出して長く扱われており、ヤズジュオールがセルジューク朝をオグズ族のなかでも特に重要視し、かつオスマン朝の先行王朝と見なしていたことがわかる。本書では、セルジューク朝の血統そのものも称揚されている。オグズ伝承の末尾部分に付け加えられた、ヤズジュオール独自の記述がそれである。そこでは、オグズの王はまずサルル氏族が継承し、その後王位に就いたのはクヌク氏族のロクマン（セルジューク朝の始祖）であったとされるのである。

ハンたること hanlık をなす者達の氏族 soy に、クヌク氏族 uruk のロクマンがいた。勇者 bahadır で方法を知る者 müdebbir、幸ある者 uğurlu であった… [中略] …そして、母からはアフラースイヤーブの血筋 nesil である<sup>(9)</sup>—テュルクの部族 il の古の帝王である。同時に、実際カラヴル・ベイ、チャグダヴル、ドウ

ムダール・ベイ<sup>(10)</sup>はクヌク〔氏族から〕である。カラヴルた  
ることとドウムダールたことは、偉大 ulu などであったと  
いう。兄弟は一致して、ロクマンをテュルク諸部族 il のハン  
とした (Yazıcıoğlu 19b)

ラシードウッディーンはセルジューク朝をオグズ族クヌク氏族と  
しており (Rashid al-din 5)、ヤズジュオールにおけるクヌク起源説は、  
先行史書の見解を受け継いだものと言える。しかし、ヤズジュオール  
が利用した諸史書—ラシードウッディーン『集史』、ルーム・セル  
ジューク朝スルタンに献呈されたセルジューク朝史であるラーワ  
ンディー『胸臆の安息』(1206/7年)、同朝の書記イブン・ビービー  
によるルーム・セルジューク朝史『尊厳な国事の尊厳な命令』(1280  
/1年)—は、何れもヤズジュオールが述べたクヌク氏族の血統讃美  
は行っていない。むしろ『集史』では、セルジューク朝は「天幕の  
骨組み職人」であるとされ、血統的には決して高いものと描かれて  
はいないのである (大塚 86)。先行史書の記述とは相反したクヌク  
氏族讃美を、ヤズジュオール自身が創作したのか、あるいは今は伝  
わっていない言説を取り込んだのかは定かではない。何れにせよ、  
本書においてクヌク氏族が血統的にも、そしてオスマン朝の先行王  
朝としても重要視されていたことは確かである。本書では、オグズ  
族の中でも特に優れた血統を持つセルジューク朝と、それをオグズ  
族の慣習に則って継承したオスマン朝、という歴史の流れが描かれ  
ている。

なおヤズジュオールは、セルジューク朝アフラーシヤーブ起源  
説にも言及している。アフラーシヤーブ起源説については第2章  
で後述するが、クヌク説とアフラーシヤーブ説の併記は、イル・  
ハン朝史家ムスタウフィーの『選史』(1330年)以降一般的になった  
見解とされる。ヤズジュオールは『選史』に言及しておらず、先行  
研究にもヤズジュオールが『選史』を利用したとの指摘はない。こ  
のため、彼が直接『選史』を参照したかどうかは判然としないが、  
当時のペルシア語圏歴史叙述において広く流通していた『選史』由  
来の伝承を、ヤズジュオールが何らかの形で聞き知った可能性は高

い。何れにせよ、ヤズジュオール語る内容はオグズ的歴史観に貫かれており、主眼はアフラーシヤーブ起源説ではなくオグズ族クヌク氏族起源説にある。

ヤズジュオール史書に近い構成を持つのが、ブルサのウラマーであるメフメト・ネシュリーが著した『世界の鑑』（15世紀末）である。本書は本来世界史として書かれたが、現在残っているのは著者が「オグズ族の歴史」として抜粋した「オグズ伝承」「セルジューク朝史」「オスマン朝史」の三章である。ネシュリーは序文で次のように述べている。

この後、スルタン・バヤズィト・ハン・ガーズィー—神が彼の幸運を続かせん—の先祖、オスマン王家の歴史をこの『世界の鑑』において、オグズ・ハンからのこの状況と子孫 *evlâd* を、三部 *kısm* に分ける…〔中略〕…第一章 *tabaka* は、オグズ・ハンの子孫の系譜 *ensâb* である。第二章は、ルームのセルジューク *Selçûkiyye-i Rûmiyye* のスルタン達を説明する。第三章は、オスマン・ガーズィー王家のスルタン達を説明する (*Neşrî* 1:7)

実際に、現存する『世界の鑑』はこのような三章構成となっている。ネシュリーはセルジューク朝をクヌク氏族としているが、ヤズジュオールのように、クヌクの血統そのものを賞讃しているわけではない。しかしながら、『世界の鑑』が持つこの構成は、セルジューク朝とオスマン朝は同じオグズ族であり、オスマン朝の先行王朝として重要であるという意識を端的に表している。

史書の構成以外でも、両王朝が同族であるとの意識は確認できる。何れも15世紀末のバヤズィト二世時代（位1481-1512）に著された三書、バヤーティー『ジェムの儀礼鏡』（1482年）<sup>(11)</sup>、アーシュク・パシャザーデ『アーシュク・パシャザーデ史』（1484年頃）<sup>(12)</sup>、ケマル『スルタン達の手紙』（1490年頃）<sup>(13)</sup>が、セルジューク朝をオグズ族でありオスマン朝と同族であるとの主張を伝えている。バヤズィト二世治世の前半は、それまでのオスマン朝に伝わっていた伝承を収集・編纂した史書が多く著された時代である。見かけ上、この時代にセルジューク朝との同族意識を伝える諸史書が集中しているが、これ

らの史書は古い時代の伝承の内容を含んでいると考えられる故に<sup>(14)</sup>、セルジューク朝との同族意識は15世紀を通じて（或いはそれ以前から）存在していたと考えられる。

15世紀には以上5点の史料がセルジューク朝とオスマン朝が共にオグズ族であるとして同族関係を主張している。セルジューク朝についての何らかの起源が言及される際、その全てがセルジューク朝をオグズ族として記している点が特筆に値しよう。

## 第2節 婚姻関係

次に検討するのは、より特殊な関係の主張、すなわちオスマン王家とセルジューク王家が直接的な婚姻関係によって結ばれていたという言説である。両家が実際に婚姻関係にあったことを示す信憑性のある同時代史料は存在せず、史実である可能性は低い。しかし、こうした直接的な婚姻関係があったとする史書を、3点確認することができる。

そのうちの最初の一つは、メフメト二世（位1444—46、1451—81）の大宰相マフムトに献呈された韻文の世界史書、エンヴェリー『訓命の書』（1465年）である。この史料のオスマン朝の章において、エンヴェリーはオスマンの七代前の祖先であるチャルシュという人物に言及し、彼がセルジューク朝のクタルミシュという人物の娘と結婚したと伝える。

チャルシュはこのトゥールル・ハン [オスマンの八代前の祖先] の息子である

クタルミシュは彼に娘を与えた<sup>(15)</sup>

このクタルミシュは、ルーム・セルジューク朝の祖である同名の人物<sup>(16)</sup>に擬されている。チャルシュとクタルミシュは、トゥグルル（大セルジューク朝の同名のスルタン。[位1040—63]が仮託されている）に追われ、アナトリアに共に逃げてきたとされる（Enverî, ed. Öztürk 14）。史実としては、クタルミシュは大セルジューク朝スルタンのアルプ・アルスラーン（位1063—72）に敗北、死亡している。エンヴェリーが伝える説は、ルーム・セルジューク朝に実際に起こった

歴史的事件に、独自の解釈を施しオスマン朝史に組み込んだものと位置づける。

また、オスマン朝最古の歴史叙述であるアフメディー『アレクサンドロスの書』(1410年)を、15世紀末に改作したルドヴァーンは、オスマンの母がルーム・セルジューク朝スルタンのアラーウッディーンの娘であるという一文をアフメディーに付け加えている(Rıdvân 352)。

英雄伝承であるエブーハイル編『サルトゥクの書』(1480年)も、両家の婚姻関係を示唆する記述を残す。本書では、アラーウッディーンが三人の娘のうち二人をカラマン、ジャンダルオール両家に降嫁させたことが伝えられている。カラマン、ジャンダルオールともに、ルーム・セルジューク朝が勢力を失った後のアナトリアにおいて、オスマン朝と覇を競った君侯国である。スルタンが二人の娘を降嫁させた後、三人目の嫁ぎ先を探す記述に続き(Saltuk 4: 308b)、オスマン達の武勇譚が語られる。実際にオスマンが結婚したかは明記されないが、実質的にオスマンが三人目の女婿と見なされているのは間違いない。

オスマン朝における歴史叙述では、以上見たようにオスマン王家とセルジューク王家の直接的な婚姻関係を伝える史料が残されている。これらは、それぞれ異なった内容を伝えており統一見解のようなものではなく、また何れも後代に影響力があつたとは言えない史書である。しかしながら、この時代の一部の史家が両家の婚姻関係を重視していたことは読み取りうる。

### 第3節 セルジューク朝との系譜意識主張の背景

以上セルジューク朝との同族・婚姻関係を確認した。表を見ると、本稿で利用した15世紀の史料15点のうち、何らかの形でセルジューク朝との系譜関係を記しているのは8点存在し<sup>(17)</sup>、世界史書・オスマン朝のみを扱った史書の区別、あるいは史家の経歴の区別なく主張されている。

セルジューク朝をオグズ族と見なすのは、既に触れたようにラシー



ドゥッディーン『集史』をはじめとした史書において示された見解であり、オスマン朝に先行するペルシア語圏歴史叙述の影響をうけたものと位置づけうる。しかし、第2章で後述するように、セルジューク朝の起源はオグズ以外にも様々な説が存在する。そのなかで、この時代例外なくセルジューク朝オグズ起源説が語られたことは、同じオグズ族出身であるオスマン朝との繋がりが強く意識されていたからであろう。

更に、何れのペルシア語圏歴史叙述においても確認できない、直接的な婚姻関係の主張においては、なおのことセルジューク朝との紐帯が意識されている。当時のアナトリアは、オスマン朝以外にもテュルク系の諸君侯国が乱立し、互いに覇を競っていた。セルジューク朝との婚姻関係は、これら諸君侯国でも主張されていた。古くは、12世紀に活躍したダニシュメンド君侯国の王がセルジューク朝スルタンの姉妹と婚姻したとの伝承が『ダニシュメンドの書』(1244/5年頃最初に成立)に記されている<sup>(18)</sup>。エレトゥナ君侯国の君主ブルハースッディーンに献呈された、アステラーバーディー『宴と戦』(1397/8年)は、エレトゥナ君侯国君主の祖先と、セルジューク朝スルタンの血縁者との婚姻を伝えている<sup>(19)</sup>。また、成立は後代のオスマン朝治下(16世紀末)であるが、カラマン君侯国の視点で叙述された特異な史料であるシキヤーリー『カラマンの書』には、二度、セルジューク朝王家の娘がカラマン君侯国の王子に与えられたと記されている(Şikâri 109, 211)。同じくオスマン朝治下で編纂された『サルトゥクの書』においては、前節で見たように、カラマン君侯国とジャンダルオール君侯国とにセルジューク朝君主の娘が降嫁されたことになっている。これらの婚姻は何れもルーム・セルジューク朝側の史料では確認できないため、史実ではない可能性が高い。しかし、史実ではない作為的な主張であることが想定されるが故に、アナトリアの諸君侯国にとってルーム・セルジューク朝王家の血統が権威を持っていた(或いは後代においてそのように見なされていた)ことがわかる。オスマン朝史家もその文脈に基づき、自身の属する王朝をセルジューク朝の血筋に位置づけようと試みたのである。

## 第2章 系譜意識の消失と起源の多様化：16世紀

オスマン朝における歴史叙述は、バヤズィト二世治世の後半である16世紀初頭に大きな転換点を経験する。15世紀における歴史叙述は基本的に民衆説話的な性格を持っていたのが、16世紀には凝った美文による歴史叙述が登場するのである(Ménage 168)。政治的には、16世紀はセリム一世治世におけるアラブ地域征服、スレイマン一世治世における支配体制の確立など、15世紀とは大きく異なる変化が起こった。

前章では15世紀のオスマン朝史料において、オスマン朝とセルジューク朝との確固たる系譜意識が語られたことを確認したが、本章では、こうした主張が16世紀以降いかに変化するのか、そしてその背景を検討する。

### 第1節 同族・婚姻関係主張の消失

まずこの時期における顕著な傾向として指摘できるのが、両家の婚姻関係を伝える史書は、16世紀以降は全く確認できない点である。また、オスマン朝とセルジューク朝を積極的に同族であるとする主張も、16世紀以降は無くなって行く。次節で見るようにセルジューク朝をオグズ族とする説はなお存在するが、アーシュク・パシャザーデやケマルのように、オスマン朝との紐帯を主張する目的で積極的に同族であることを強調する説は確認できない。表に明らかのように、本稿で利用した16世紀の史料16点のうち、婚姻関係を伝える、あるいは積極的に同族関係を主張する史料は0点である。15世紀と比較した場合、これは大きな変化と言える。

こうしたセルジューク朝との系譜意識の欠如は、16世紀以降多く作成された『系譜書』と呼ばれる史料においても確認できる。この史料は冊子や巻物の形態を持ち、アダムに始まり諸預言者や諸王を経て、様々な王朝の系譜を含みつつ最終的にオスマン朝に連なる系譜を図示している。現存する最古の『系譜書』はバヤズィト二世期に作成され、その後スレイマン一世時代に後に広く受け入れられた

ヴァージョンが書かれた。以降、百点以上の写本が作成されており、オスマン人士の持つ系譜意識への影響は大きかったと考えられる。この『系譜書』では、セルジューク朝とオスマン朝の系譜は何らつながりを持っていない。セルジューク朝の系譜は、他王朝の家系と全く関わりを持たずに始まり、終わっている<sup>(20)</sup>。

また『系譜書』以外にも、テュルク・モンゴル系諸王家の系譜について独特の情報を含んだバイブルトル・オスマンによる世界史書『世界の鏡新史』（1591年頃）の伝える系譜情報も示唆的である。本書の系譜はノアから始まり、オスマン朝、セルジューク朝、チンギス・ハンの王朝、アク・コユンル朝などの系譜が縷々語られているのだが、オスマン家とセルジューク家はかなり古い時代（オスマンの31代前で分岐）で分岐している。オスマン家は、むしろチンギス家やアク・コユンル家（オスマンの6代前で分岐）と近縁関係にある（‘Osmân 12-30）。この系譜においては、セルジューク朝との血縁関係が他王朝に比べて遠いものと見なされていたと言える。本書の伝本は『系譜書』と異なり少なく、内容も特異であるため影響力があったとは言えないが、他史料でも確認できる、セルジューク朝との関係軽視の傾向と符合している点は注目に値する。

以上確認したように、15世紀に強調されていたオスマン朝とセルジューク朝との同族・婚姻関係は、16世紀に入ると著しくその重要性を失っていったのである。

## 第2節 セルジューク朝起源の多様化

以上、16世紀の史書では同族・婚姻関係の積極的な主張が見られなくなることを確認したが、それではセルジューク朝の起源はどのように記述されているのだろうか。15世紀においては、セルジューク朝は基本的にオグズ族（のクヌク氏族）とされた。起源について特に触れていない史書はあっても、起源について何らかの言及がある場合は、例外なくオグズ族とされていた。16世紀でもオグズ族起源説は確認することができるが、この時期の特徴として、オグズ族以外の起源が語られる点が挙げられる。以下、セルジューク朝非オ

グズ族起源説であるアフラスィヤーブ起源説とアブラハム起源説について、その内容と由来について検討する。

# ①アフラスィヤーブ起源説

アフラスィヤーブとは、フィルダウスィーのペルシア語叙事詩『王の書』(1010年)においてテュルク族の王とされる伝説的な人物である。彼をセルジューク朝の祖とするのは、大セルジューク朝の同時代史料ニザームルムルク『統治の書』(1091年頃)において確認できる古い説である(大塚 83-4)。オスマン朝でも古くはヤズジュオールが、クヌクとアフラスィヤーブ起源説を併記した(Yazıcıoğlu 19b, 第1章で引用)。但し既に触れたように、彼の書はオグズ族の歴史を執筆するという立場で著されており、クヌク起源説に力点が置かれる。オスマン朝歴史叙述においてアフラスィヤーブ起源説が広がりを見せるのは16世紀以降である。

16世紀初頭にバズイト二世(位1481—1512)の命で著され高名を博した、イドリース・ビトリスィーによるペルシア語のオスマン朝史書『八天国』では、ヤズジュオール同様、セルジューク朝の起源としてクヌクとアフラスィヤーブが併記される(Bitlîsî 35a)。だが本書にはヤズジュオールのようなオグズ伝承重視の姿勢は見られず、むしろアフラスィヤーブをセルジュークの「30代前」の祖先であるとし、アフラスィヤーブ起源説をより細かく記している。16世紀に『八天国』と同じくクヌク起源説とアフラスィヤーブ起源説を併記した史家としては、シャーナーメ詠みを務めたセイイド・ロクマンの『技の書』(1578年)が挙げられる(Lokmân 32b)。

スレイマン一世時代(位1520—66)には、クヌク起源説に言及せずアフラスィヤーブ起源説を採用した史書が現れる。多くの読者を獲得した簡便な世界史書、キュチュク・ニシャンジュ『ニシャンジュ史』(1562年頃)は、アフラスィヤーブを33代前のセルジューク朝の祖として伝えた(Nişancı 98)。

イル・ハン朝史家ムスタウフィーのペルシア語世界史書『選史』は、セルジュークは34代でアフラスィヤーブに遡るとしており、『選史』の所説はのちのペルシア語圏歴史叙述に大きな影響を与え

た<sup>(21)</sup>。『ニシャンジュ史』は『選史』の名に直接言及していないが、両者の伝える人数が近く、また『選史』はスレイマーン一世時代にオスマン語に翻訳されていることから (*İstanbul Kütüphaneleri* 99-100)、『選史』の『ニシャンジュ史』への影響が想定できる<sup>(22)</sup>。

『八天国』と『ニシャンジュ史』の二書は共にオスマン朝において名声を博し広く読まれた書であるため (今澤 3 ; Özcan 175)、この時期のオスマン朝において、セルジューク朝アフラーシヤープ起源説は広く受容されたと考えて良からう。ビトリシーはもともとアク・コユンル朝に仕えたペルシア語文化圏の知識人であり、またキュチュク・ニシャンジュの同時代には『選史』や、『選史』の見解を踏襲したペルシア語圏の世界史書であるガッファリー『画廊』が翻訳されている (Rieu 24-5)。この事実は、16世紀におけるアフラーシヤープ起源説の登場に、ペルシア語圏歴史叙述の影響が大きかったことを示唆している。

## ②アブラハム起源説

アフラーシヤープ説以外のセルジューク朝非オグズ族起源説として、セルジューク朝の起源を預言者アブラハムに求めるものが存在する。この説を最初に伝えたのは、15世紀末のネシュリーであり、彼は否定しつつもこの説に触れている。

そしてセルジューク達もまた、アブラハム・ハリル・アッラフマーンに到達するということが、実際に幾つかのアジャムの諸史で言及されている。しかし、[この説は] アジャム達の醜い狂信 *ta'assubât-ı şenî'a* である (Neşrî 1:56)

この説は「アジャムの諸史」に書かれているとするが、これがどの書を指すかは不明である。しかし、世界史書であるメフメト・ザイーム『集史』(1578年頃)は、セルジューク朝史の章においてセルジュークは「東方にいるテュルク達の血筋の部族 *kavm*」であると記すと同時に (Za'im 160b)、「彼らの血筋は、ハリルッラー・アブラハム様—彼に神の平安あれ—に遡る」(Za'im 161b)と、アブラハム起源説を否定することなく伝えている。その際彼は「王達とスルタン達の系譜 *Şecere-i Mulûk u Selâtin*」という情報源に言及してい

る。これに対応する具体的な史料名は明らかではなく、書名ではなく一般的な意味での系譜情報とも考えられる。

また、1598/9年にアブールアッバース・アフメトによって著されたアラビア語の世界史書『諸国の諸情報』もザイーム同様に、セルジューク朝はテュルクであり、アブラハムの子孫であると述べている (Abū'l-ʿAbbās 196b)。

このアブラハム起源説がどのような情報源に由来するのかは判然としなない。アラビア語・ペルシア語史書のセルジューク朝起源説を網羅的に調査した大塚の研究でも、アブラハム起源説に触れた史書は皆無である (101-4)。但し、アッバース朝時代の文人ジャーヒズ (Jāhīz 64) によるテュルク擁護の書『テュルクの美德』は、テュルクをアブラハムの子孫とする説を伝え、また高名な系譜書であるイブン・イナバ『誉れある諸部』も同様の説を伝える<sup>(23)</sup>。セルジューク朝アブラハム起源説は、こうした「テュルクのアブラハム起源説」から派生したと考えられる。今は失われた情報として、テュルクのアブラハム起源説に由来するセルジューク朝アブラハム起源説が存在しており、オスマン朝においてそれを採用する史家が登場したのであろう。

以上、二つのセルジューク朝非オグズ族起源説を確認した。勿論15世紀の史料と同様に、オグズ族起源説を唱えた史料は存在する。既に触れた『八天国』と『技の書』、マトラクチュ・ナスーフによる世界史書『諸史集成』 (16世紀半ば、Nasūh 510a) である。また、ザイーム『集史』も、セルジューク朝史の章でなく史書冒頭のテュルクについて記した部分で、セルジューク朝を「グズズ (オグズ)」として言及している (Za'im 11a)。しかし、『八天国』はアフラーシヤーブ起源説と併記でむしろそちらを強調していること、そして『技の書』と『諸史集成』の伝本は少ない (それぞれ文献目録で挙げた一点のみ)<sup>(24)</sup> ことから、セルジューク朝をオグズ族とする認識は、15世紀のように主流ではなかったのは明らかである。

### 第3節 同族・婚姻関係主張の消失と起源の多様化の背景

16世紀における顕著な特徴は、第1節で見たように、オスマン朝とセルジューク朝との系譜意識が一切語られなくなる点である。セルジューク朝—オスマン朝の史書では実質的にルーム・セルジューク朝—の権威が及ぶ範囲は、アナトリアに限定的なものであったと見なしうる。セルジューク朝との紐帯は、オスマン朝の支配領域がアナトリアに限られている間は、重要なモチーフであり続けたであろう。しかしオスマン朝を取り巻く状況は、16世紀以降激変する。オスマン朝はアラブ地域を支配するなど大きく発展し、旧ルーム・セルジューク朝領を遙かに越える領域を支配するようになった。アナトリアの諸君侯国も、全て滅亡するかオスマン朝の支配下に入った。アナトリアのライバルが消滅し、いまや世界帝国となったオスマン朝にとって、セルジューク朝の持つ権威は重要性を失ったのである。15世紀と16世紀で、オスマン朝の正当化政策の文脈におけるセルジューク朝の扱いが変化したことについては Imber による指摘があるが<sup>(25)</sup>、系譜意識についても同様の方向性の転換が起こったのである。

代わって登場したのは、いわばセルジューク朝起源の「ペルシア化」というべきアフラーシヤーブ起源説、同じく「アラブ化」といえるアブラハム起源説など、セルジューク朝の起源についての多様な諸説である。特に前者は、『八天国』『ニシャンジュ史』という高名を博した二書において採用されていることから、この時代に最も広範に受容された説と見なすことができる。ペルシア語圏歴史叙述においてアフラーシヤーブ起源説は、『選史』以降広く受け入れられるようになり、そのペルシア語圏の歴史叙述の幾つかは、スレイマン一世時代に翻訳されている。またペルシア語圏の歴史叙述は、16世紀半ば以降のオスマン朝史家に表現的な面で強い影響を与えたとされる (Fleischer 236)。16世紀のアフラーシヤーブ起源説の隆盛は、こうした史学史の潮流を受け継いだところに起こったのである。

## お わ り に

15世紀のオスマン朝における歴史叙述では、セルジューク朝との同族・婚姻関係が繰り返し主張された。この背景には、当時のオスマン朝を取り巻く政治的状況がある。当時のオスマン朝には、対抗相手としてアナトリアの東半を支配するアク・コユンル朝や、コンヤ周辺を支配したカラマン君侯国などが存在していた。両王朝はいずれもルーム・セルジューク朝の後継者を自認し、また他の君侯国もルーム・セルジューク朝王家との婚姻関係を主張していた。ルーム・セルジューク朝の血統の利用は、同朝の旧領地を支配する諸王朝に共通の重要なモチーフだったのである。こうした政治的状況下において史筆を取ったオスマン朝史家が、自らが属する王朝とセルジューク朝とを何らかの形で結びつけ、権威を高めようと試みたのは自然であつたろう。しかし、セルジューク朝との関係は、16世紀に入ると変化を見せる。同族関係を唱える説は重視されなくなり、直接的な婚姻関係を主張する説は完全に途絶える。セルジューク朝は、16世紀以降アナトリアを越えた領域を支配する「イスラーム的世界帝国」となったオスマン朝にとって、さほど重要な存在ではなくなったのである。

その16世紀において、諸史書はセルジューク朝の起源を、オグズ族だけではなくアフラーシヤーブやアブラハムなど多様な形で語っている。これはオスマン朝に先行する史書が伝える様々な見解の影響があつたことと同時に、16世紀以降のセルジューク朝の重要性の低下によって、セルジューク朝とオスマン朝とを系譜的に結びつける必要が無くなり、多様な解釈を許したという側面がある。オスマン朝の権威付けの手段としてセルジューク朝の存在が利用されている間は、セルジューク朝の起源はオスマン朝と同じオグズ族でなくてはならなかった。しかし、セルジューク朝の権威が有効に機能しなくなった時代においては、先行史書における様々な起源を受け入れる余地が生まれたのである。なかでもアフラーシヤーブ起源説は、当時のペルシア語圏歴史叙述において主流となっていた所説で



ある。オスマン朝の権威強化という文脈では、セルジューク朝がアフラーシヤーブ起源であることは何ら意味を持たないが、史学史的な文脈で言うならば、当時のペルシア語圏歴史叙述において「定説」であったアフラーシヤーブ起源説は、採用されてしかるべき説だった。

オスマン朝における歴史叙述に見えるセルジューク朝との系譜意識の変化は、政治的状況の転換によってオスマン王家の権威付けという要素が重要性を失い、逆に史学史的要素が重視されるという、二つの要素が経験した変容の交点において起こったのである。

こうして16世紀には、セルジューク朝との系譜意識はその重要性を低下させたが、19世紀後半、ヨーロッパのトルコ学の影響のもとトルコ主義が台頭すると、再びオスマン朝の同族としてのセルジューク朝が重要視されるようになる。近代におけるセルジューク朝の「再評価」についての検討は別稿に譲るが<sup>26)</sup>、近代オスマン朝におけるナショナル・ヒストリー構築の前史としても、本稿の結論は意義を持つ。

## 文献目録

文献によっては複数のテキストを利用しているが、本文中もしくは註で示した参照頁は最初に挙げたテキストのものであり、大きな異同がない限りそれで代表させた。二つめ以降のテキストの参照頁を示す際は、編者等を付すことにより区別した。目録中、二つめ以降のテキストの著者名は省略し、写本の場合は所在のみ記した。略号は以下の通り。BL: British Library, BN: Bibliothèque nationale de France, NK: Nuruosmaniye Kütüphanesi, SB: Staatsbibliothek zu Berlin, SK: Süleymaniye Kütüphanesi, TSMK: Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi。

### I. 史料

Abû'l-'Abbâs. *Ahbârü'l-diüvel*. BL, Or. 1548. (アブールアッバース『諸国の諸情報』)

Ahmedî. *İskender-nâme: İnceleme-Tıpkıbasım*. Ed. İ. Ünver. Ankara, 1983; *History of the Kings of the Ottoman Lineage and their Holy Rides against the Infidels*.

- Ed. K. Silay. Boston, 2004. (アフメディー 『アレクサンドロスの書』)
- ‘Âlî. *Fusûl-i Hall-ü-Akd*. Ed. E. S. Yücel. Kayseri, 1990 (Erciyes Üniversitesi, Yüksek Lisans Tezi). (アーリー 『統治の諸部』)
- . *Künhü ’l-Ahbâr*. 5 Vols. Istanbul, 1277; *Kitabü ’t-tarih-i künhü ’l-ahbar: Kayseri Raşid Efendi Kütüphanesindeki 901 ve 920 No. lu nüshalara göre*. Ed. A. Uğur. 2 Vols. Kayseri, 1997. (アーリー 『諸情報の精髓』)
- Anonymous [Giese]. *Die altosmanischen anonymen Chroniken*. Ed. F. Giese. Part I. Breslau, 1922. (著者不明 『ギーゼ校訂版無名年代記』)
- Anonymous [Oxford]. *Tevârih-i ‘Âl-i ‘Osmân*. as “Rûhî Târîhi.” Eds. H. E. Cengiz and Y. Yücel. *Belgeler*. 14/18 (1992), 359-472+facsimile. (著者不明 『オックスフォード写本無名年代記』)
- Anonymous [Silsile]. *Silsile-nâme*. TSMK, Hazine 1590; SK, Ayasofya 3259.
- ‘Âşıkpaşazâde. *Osmanoğulları’nın Tarihi*. Eds. K. Yavuz and M. A. Y. Saraç. Istanbul, 2003; *Tevârih-i ‘Âl-i ‘Osmân’dan ‘Âşıkpaşazâde Ta’rîhi*. Ed. ‘Âlî. Istanbul, 1332; *Die altosmanische Chronik des ‘Âşıkpaşazâde*. Ed. F. Giese. Leipzig. 1929; “Tevârih-i ‘Âl-i Osman.” Ed. Atsız. *Osmanlı Tarihleri*. Istanbul, 1949, 77-319; *Vom Hirtenzelt zur Hohen Pforte*. Trans. R. F. Kreutel. Graz, Wien and Köln, 1959. (アーシュクパシャザーデ 『アーシュクパシャザーデ史』)
- Bayâtî. *Câm-ı Cem-Âyîn*. Trans. K. Fahrettin. *Osmanlı Tarihleri*. Istanbul, 1949. 371-405; SB, Ms. or. oct. 1943. (バヤーティー 『ジェムの酒宴杯』)
- Bitlîsî. *Heşt Bihişt*. TSMK, Hazine 1655; SK, Esad 2199. (ビトリスイー 『八天国』)
- Cenâbî. *Ta’rîh-i Cenâbî*. NK 3102. (ジェナービー 『ジェナービー史』)
- Ebü’l-Hayr Rûmî. *Saltuk-name*. 7 Vols. Ed. F. İz. Cambridge, 1974-7. (エブールハイル・ルーミー 『サルトゥクの書』)
- Enverî. *Fatih Devri Kaynaklarından Düstûrnâme-i Enverî Osmanlı Tarihi Kısmı*. Ed. N. Öztürk. Istanbul, 2003; İzmir Millî Kütüphanesi 16144. (スレイマニエ図書館所蔵マイクロフィルムを利用). (エンヴェリー 『訓命の書』)
- Esterâbâdî. *Bezm ü Rezm*. Istanbul, 1928. (アステラーバーディー 『宴と戦』)
- Hadîdî. *Tevârih-i ‘Âl-i Osman*. Ed. N. Öztürk. Istanbul, 1991. (ハディーディー

- 『ハディーディー史』)
- Hoca Sa'de'd-dîn. *Tacii 't-tevârîh*. 2 Vols. Istanbul, 1280. (ホジャ・サーデッディン『諸史の王冠』)
- Ibn-i 'Alâ. *Dânişmend-nâme*. Ed. N. Demir. 2004, Ankara. (イブニ・アラー『ダニシュメンドの書』)
- Ibn 'Inaba. *al-Fuṣūl al-Fakhriya*. Eds. K. Mūsawī and J. M. Urmawī. Tehran, 1363. (イブン・イナバ『誉れある諸部』)
- Jāḥiẓ. *Rasā'il al-Jāḥiẓ*. Cairo, 1933. (ジャーヒズ『テュルクの美德』)
- Karamânî Mehmed Paşa. *Tevârîhu's-selâṭini'l-'Osmân*. SK, Ayasofya 3204; SK, Âşir Efendi 234. (カラマーニー『カラマーニー史』)
- Kemâl. *XV. Yüzyıl Tarihçilerinden Kemal Selâṭin-nâme (1299-1490)*. Ed. N. Öztürk. Ankara, 2001. (ケマル『スルタン達の書』)
- Konevî. *Ta'rîh-i 'Âl-i 'Osmân*. Kayseri Umumî Kütüphanesi, 956.07 (トルコ国民図書館所蔵マイクロフィルムを利用); BN, persan 528. (コネヴィー『コネヴィー史』)
- Lârî. *Mir'âtü'l-edvâr*. SK, Ayasofya 2085. (ラーリー『諸時代の鏡』)
- Lokmân. *Hüner-nâme*. TSMK, Hazine 1523. (ロクマン『技の書』)
- Lütfî Paşa. *Lütfî Paşa ve Tevarih-i Al-i Osman*. Ed. K. Atik. Ankara, 2001. (ルトフィー『ルトフィー史』)
- Mustawfî. *Ta'rîkh-i Guzîda*. Ed. 'A. Nawāyî. Tehran, 1339. (ムスタウフィー『選史』)
- Nasûh. *Mecma'u't-tevârîh*. SK, Fatih 4278. (ナスーフ『諸史集成』)
- Nişancı. *Ta'rîh-i Nişancı*. Istanbul, 1279. (キュチュク・ニシャンジュ『ニシャンジュ史』)
- Neşrî. *Kitab-ı Cihan-nüma*. Eds. F. R. Unat and M. A. Köymen. 2 Vols. Ankara, 1951-5; *Die altosmanische Chronik des Mevlan Mehmed Neschri*. Vol. 2. Ed. F. Taeschner. Leipzig, 1951. (ネシュリー『世界の鑑』)
- Oruç. *Die frühosmanischen Jahrbücher des Urudsch*. Ed. F. Babinger. Hannover, 1925; *Oruç Beğ Tarihi*. Ed. Atsız. n.d. (1972 ?); BN, turc supplément 1047. (オルチ『オルチ史』)
- 'Osmân. *Tevârîh-i Cedîd-i Mir'ât-ı Cihân*. Ed. Atsız. Istanbul, 1961. (オスマン

『世界の鏡新史』)

Rashîd al-din. *Jâmi' al-Tawârikh*. Vol.2-5. Ed. A. Ateş. Ankara, 1999. (ラシードゥッディーン『集史』)

Rıdvân. "Ahmed Rıdvân'ın İskender-nâmesindeki Osmanlı Tarihi Bölümü." Ed. İ. Ünver. *Turkoloji Dergisi* 8 (1979): 345-402. (ルドヴァーン『アレクサンドロスの書』)

Şikârî. *Karaman-nâme*. Eds. M. Sözen and N. Sakaoğlu, Istanbul, 2005. (シキヤーリー『カラマンの書』)

Şükrullâh. *Bahcetü 't-tevârîh*. NK 3059. (シュクルッラー『諸史の光喜』)

Yazıcıoğlu. *Ta'rîh-i 'Âl-i Selcûk*. TSMK, Revan 1391; TSMK, Revan 1390; SB, Ms. or. quart. 1823. (ヤズジュオール『セルジューク王家史』)

Za'im. *Câmi'u't-tevârîh*. TSMK, Revan 1382; NK, 1382. (ザイーム『集史』)

II. 研究

Babinger, F. *Osmanlı Tarih Yazarları ve Eserleri*. Trans. C. Üçok. Mersin, 1992.

Emecan, F. *İlk Osmanlılar ve Batı Anadolu Beylikler Dünyası*. Istanbul, 2001.

Fleischer, C. H. *Bureaucrat and Intellectual in the Ottoman Empire*. Princeton, 1986.

Hillenbrand, C. *Turkish Myth and Muslim Symbol: The Battle of Manzikert*. Edinburg, 2007.

Imber, C. "The Ottoman Dynastic Myth." *Turcica* 19 (1987): 7-27.

———. "Ideals and Legitimation in Early Ottoman History." *Süleyman the Magnificent and His Age: The Ottoman Empire in the Early Modern World*. Eds. M. Kunt and C. Woodhead. London and New York, 1995: 138-53.

———. *The Ottoman Empire, 1300-1650*. New York, 2002.

*İstanbul Kütüphaneleri Tarih-Coğrafya Yazmaları Katalogları*. Istanbul, 1943.

Köprülü, M. F. *Les origines de l'empire ottoman*. Paris, 1935.

Meisami, J. S. *Persian Historiography, to the End of the Twelfth Century*. Edinburgh, 1999.

Ménage, V. L. "The Beginnings of Ottoman Historiography." *Historians of the Middle East*. London, 1962: 168-79.

Özcan, A. "Historiography in the Reign of Süleyman the Magnificent." *The Otto-*

- man Empire in the Reign of Süleyman the Magnificent*. Vol. 2. Ankara, 1988: 167-238.
- Rieu, C. *Supplement to the Catalogue of the Arabic Manuscripts*. London, 1894.
- Yücel, Y. *Kadı Burhaneddin Ahmed ve Devleti (1344-1398)*. Ankara, 1970.
- 井谷鋼造「『大セルジューク朝』と『ルーム・セルジューク朝』」『西南アジア研究』41 (1994): 21-56.
- 今澤浩二「14世紀アナトリア史の根本史料『宴と戦い』について」『オリエント』33/1 (1990): 113-23.
- .「オスマン朝年代記『八天国』の2系統の写本について」『桃山学院大学国際文化論集』26 (2002): 3-28.
- 大塚修「キニク氏族とアフラーシヤーブーペルシア語普遍史叙述の展開とセルジューク朝の起源—」『オリエント』50/1 (2007): 80-105.
- 小笠原弘幸「オスマン朝起源論争史 (1916—2005年)」『オリエント』48/1 (2005): 208-22.
- 杉山正明『遊牧民から見た世界史：民族も国境もこえて』日本経済新聞社、1997.
- 鈴木董『オスマン帝国の権力とエリート』東京大学出版会、1993.

## 註

- (1) オスマン朝の起源をめぐる研究動向については、拙稿「オスマン朝起源論争史」を参照。
- (2) 現代の研究では、イラン・イラクを中心とした政権を大セルジューク朝、アナトリアの政権をルーム・セルジューク朝と呼ぶが、史料中ではしばしば区別されない。本稿では、特に区別を必要とするとき以外「セルジューク朝」と表記する。両朝の史料中の呼称については井谷 (21-2) も参照。
- (3) 大塚 94。なお本稿で「ペルシア語圏歴史叙述」と述べる場合、オスマン朝以外で著されたペルシア語史書を指して用いることとする。オスマン朝においてもペルシア語による史書は著されており、それといわゆるイラン地域で著されたペルシア語史書とを区別するためである。
- (4) 事実史の文脈におけるオスマン朝とセルジューク朝との関係につい

ては、これまで多くの研究がなされている。その代表格たる Köprülü は、直接両朝に何らかの関係があったかどうかには言及していないが、トルコ史一般という枠組みにおいて、オスマン朝をルーム・セルジューク朝の継続・発展と見なすことを提示している (29-30)。

- (5) 16世紀末までをオスマン帝国の前期、乃至は古典期と見なすことについては、鈴木 (75-7)。
- (6) 本論では紙幅の都合で十分に触れることができなかった史家の経歴や史書の形式等も表に示したので、適宜参照されたい。また分析においては、表に羅列しただけでは見えにくい各史書の持つ影響力も考慮する必要がある。例えば『八天国』『ニシャンジュ史』の伝本は多く、同時代の評価も高い。対して例えば『ケマルパシャザーデ史』の写本や後代の史書における引用は少なく、多くの読者を獲得していなかったと考えられる。但し写本の多寡が直ちに影響力を示すわけではない。例えば『オックスフォード写本無名年代記』の伝本は少ないが、『世界の鑑』や『ルーヒー史』で利用され、当時よく知られていたことが窺える。各史書の持つ影響力の客観的明示は現段階では困難を伴うが、必要な場合その都度注記するよう努めた。
- (7) 例えば杉山はモンゴルについて、「おもに血縁もしくは仮構された疑似血縁でむすばれた小規模な集団をかりに「氏族」といい、そうした「氏族」集団が地縁や政治上の理由（その場合も、「血」に仮託された親疎関係が強調された）でいく個か寄りあつまったものを、やはりかりに「部族」というほどのことにすぎない」と指摘している (295)。オスマン朝史料に見られる「部族」概念も同様の傾向を持つと思われるが、この側面での分析は今後の課題としたい。
- (8) 現存するオスマン朝の最も古い叙述史料はアフメディー『アレクサンドロスの手紙』(1410年)であるが、これは当初ゲルミヤン君侯国のもとで書かれている。
- (9) セルジューク朝が、アフラーシヤーブ裔を称するカラ・ハン朝から降嫁をうけたこと (Meisami 269) を示すと思われる。
- (10) カラヴルは「先陣」、ドゥムダールは「しんがり」の意。チャグダヴルの意味は判然としなが、<sup>1</sup>「太鼓持ち」の可能性はある。

- (11) 両朝を共にオグズ族とし、オスマンの数代前から両家は親交を結んでいたという説すら伝えている。この史料では、オスマンの祖先の一人がセルジューク家王子の傅育係 lala を勤めており (Bayâtî 391)、また「エルトゥールル」の名前がセルジューク家の人物に由来するとされる。すなわち、セルジューク朝の王子トゥールルという人物が訪問した際に生まれたためにその名が付けられたという (Bayâtî 394)。なお本書は、当初バヤズィト二世と王位を争った皇子ジェムに献呈されたが、のちバヤズィト二世の時代に書き直された。
- (12) 本書の一部のテキストは、オスマンの父エルトゥールルがアナトリアに移住した際、セルジューク朝のもとに向かうことを決断したのは、同じ血筋だからだと伝える。テキストのうち、‘Âşıkpaşazâde, ed. ‘Alî 3-4; ed. Giese 7; ed. Atsız 93では、アラーウッディーンの血筋を、「kendi [エルトゥールル] neslinden」だとしているが、trans. Kreutel 22と ed. Yavuz 322は「Selçûk neslinden」と記述され、同族とはされていない。この二系統のうち、どちらが本来の形を伝えているのかは判然としない。最良のテキストとされるベルリン写本 (trans. Kreutel が利用) が原形を伝えている可能性が高いが、多くのテキストが異読を伝えている。可能性としては、元々の記述は後者であったのが、筆耕者が前者の表現に改変したことが考えられる。
- (13) セルジューク朝が同じオグズ族であるから、オスマン集団がセルジューク朝のもとへ赴いたと述べられ、またオスマンが「セルジュークの息子 ibn-i Selçûk」であると語られている (Kemâl 23)。この「息子」という表現は比喩である可能性もある。しかし擬制的なものにせよ、オスマンが息子と見なされていた点は指摘できる。
- (14) 特に『アーシュクパシャザーデ史』は、第二代スルタンであるオルハンのイマームを務めたヤフシー・ファキーフという人物の書を利用したとされるため (‘Âşıkpaşazâde 319)、これを額面通り受け取れば極めて古い時代の伝承を伝えていることになる。
- (15) Enverî, ed. Öztürk 7. なお、同書のセルジューク朝の章にも、オスマン朝の章同様に両王朝の関係を示す記述が加えられており (Enverî, İzmir 6)、両家のつながりが重視されていたのは明らかである。

- (16) ルーム・セルジューク朝初代スルタンであるスライマーンの父、クトルミシュのこと。彼については、井谷 (27-32) を参照。
- (17) 本稿で示す、「何点中何点」という数字はあくまで目安である。先に触れたように史書の影響力を勘案する必要がある、また性格に近い史書（例えば『オックスフォード写本無名年代記』と『ルーヒー史』）を完全に別著作として数えるべきか否か、などの問題があるからである。
- (18) Ibn-i ‘Alâ 272. 後代のアーリーも同様の伝承を伝える（‘Âlî, *Fusûl* 108）。史実としては、ダニシュメンド君侯国はルーム・セルジューク朝と対抗関係にあったが、『ダニシュメンドの書』ではその対抗関係は全く触れられていない。これは、同書が著された時代にあつては、既にルーム・セルジューク朝の覇権が確立していたからであろう。
- (19) Esterâbâdî 45. エレトウナ君侯国の血筋については Yücel (15-9)。本史料については、今澤「14世紀アナトリア史」を参照。
- (20) チングスのみ、オスマン朝とのつながりが確認される（Anonymous [Silsile], Ayasofya 46）。
- (21) 大塚 86。33と34の違いはあるが、これはアフラーシヤーブやセルジュークその人を数えるか否かの差と解釈できる。なお『選史』はクヌク起源説も併記しているが、ペルシア語普遍史体系に結びついたアフラーシヤーブ起源説をより重視していたことは、大塚が指摘するところである (95)。
- (22) また、『選史』と『ニシャンジュ史』が共に古代イランの四王朝（ピーシュダード、カヤーン、アシュカーン、サーサーン）を含んでいることも、ニシャンジュが『選史』を参照した可能性を強めている。
- (23) イブン・イナバは、モンゴルの系譜について説明する際、モンゴルとテュルクを同族とした上でアブラハム起源説に言及している（Ibn ‘Inaba 12）。
- (24) ロクマンはシャーナーメ詠みであり、その意味では彼の著作はスルタンによって受け入れられた、いわば「公式」なものである。しかし『技の書』伝本はミニアチュール付き豪華写本がトプカプ宮殿付属図書館に一点存在するのみであり、後代の史書への影響力は大きくはない（『技の書』の内容は特徴的なものが多く、他史書の内容との比定は比較的容



易である)。

(25) “Ideals” 146. 但し変化の内容については触れられていない。

(26) Hillenbrand は、「マンズィケルトの戦い」の言説がアナトリア・トルコ主義を奉ずるトルコ共和国において注目を集め、重要なシンボルとして機能したと論じている (196-220)。この研究はオスマン朝の歴史叙述におけるセルジューク朝に殆ど触れていないものの、前近代の記述が近代においていかに再解釈され、利用されたかという問題設定は高く評価できる。

付記：本研究は、文部科学省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による史料調査の成果の一部である。

【表】 15-16世紀のオスマン朝における史書（世界史、あるいはオスマン朝初期史の叙述を含むオスマン朝史）の情報と、そこに見られるセルジューク朝の起源およびオスマン王家との関連

著者名、書名	成立年代	経歴	截呈先	史書のタイプ	同族・婚姻関係の主張	オグズ族起源記	アフラーシヤープ起源説	アブラハム起源説
アフメディー『アレクサンドロスの書』	1410年	諸侯国に仕えた詩人 書記	皇子スレイマンラト二世？	世界史	×	×	×	×
ヤズジュオール『セルジューク王家史』	1424年			オグズ伝承、セルジューク朝、イル・ハン朝	×	○（クスク）	○	×
シュクルラー『諸史の光輝』	1459年	ウラマー	大宰相マフムト	世界史	×	×	×	×
エンヴェリー『訓命の書』	1465年	ウラマー	大宰相マフムト	世界史	オスマンの祖先と婚姻関係	○（オグズ）	×	×
カラマーニー『カラマーニー史』	1480年	大宰相	不明	オスマン朝史	×	×	×	×
エファールハイル『サルトゥクの書』	1480年頃	不明	皇子ジェム	特殊	セルジューク家とオスマン家の婚姻関係が示唆	×	×	×
バヤーディー『ジェムの酒宴杯』	1482年	元アク・コユンル朝に仕える書記？	皇子ジェム	特殊	オスマンの数代前から親交	○（クスク）	×	×
著者不明『オックスフォード写本無名年代記』	1480年代	不明	バヤズイト二世	オスマン朝史	×	×	×	×
ルドヴァーン『アレクサンドロスの書』	15世紀末	不明	不明	世界史	オスマンの母がセルジューク家	×	×	×
オルチ『オルチ史』	15世紀後半	エディルネ出身	不明	オスマン朝史	×	×	×	×
アーシュク・バシャザーデ『アーシュク・バシャザーデ史』	15世紀末	デルヴィーシュ	不明	オスマン朝史	エルトゥールと同族（一部テュルク）	○（エルトゥールと同族＝オグズ）	×	×
ケマル『スルタン達の書』	1490年頃	不明	バヤズイト二世	オスマン朝史	「セルジュークの息子」	○（オグズ）	×	×
コネヴィー『コネヴィー史』	15世紀末	コンヤ出身	バヤズイト二世	オスマン朝史	×	×	×	×

著者不明『ギーズ校訂版無名年代記』 ネシュリー『世界の鑑』	15世紀末 1485—94年の間	不明 ブルサのウラ マー	不明 世？	オスマン朝史 オグズ伝承、 セルジュク 朝、オスマン 朝、オスマン	×	史書の構成か ら画朝を同族 と見なす	×	○ (肯定的言 及)
ルーヒー『ルーヒー史』	16世紀初頭	エディルネ出 身 ウラマー	バヤズイト二 世？	オスマン朝史 オスマン朝史	×	×	×	×
ケマル・バシヤザデ『ケマル・バシヤ ザデ史』	16世紀初頭	ウラマー	バヤズイト二 世、セリム一 世	オスマン朝史	×	×	×	×
ビトリスイー『八天国』	16世紀初頭	元アク・コユ ンル朝に仕え る	バヤズイト二 世、セリム一 世	オスマン朝史	×	○ (クヌク)	○	×
著者不明『承譜書』	バヤズイト二世 時代	不明	不明	特殊	×	×	×	×
ハデイーディー『ハデイーディー史』	1523-30/1年の 間	ハティームブな ど	スレイマン一 世？	オスマン朝史	×	×	×	×
ナスーフ『諸史集成』	16世紀半ば	デヴシルメで 宮廷へ	スレイマン一 世	世界史	×	○ (クヌク)	×	×
キュチュク・ニシヤンジュ『ニシヤンジュ 史』	1562年以降	ニシヤンジュ	不明	世界史	×	×	○	×
ルトフイー『ルトフイー史』	1553-63年の間	大宰相 イラン出身の 文人	不明	オスマン朝史 世界史	×	×	×	×
ラーリー『諸時代の鏡』	1566年頃	ウラマー	不明	世界史	×	×	×	×
ホジャ・サードッディン『諸史の王冠』	1575年	ゼアーメスト保 持者	大宰相ソコ ル？	オスマン朝史	×	×	×	×
ザイーム『集史』	1578年頃	ウラマー	不明	世界史	×	○ (グッス)	×	○
ロクマン『技の書』	1578年	シャナーメ 歎み	大宰相ソコ ル	オスマン朝史	×	○ (クヌク)	○	×
ジュナービー『ジュナービー史』	1588年頃	ウラマー	不明	世界史	×	×	×	×
オスマン『世界の鏡新史』	1591年	不明	不明	世界史 世界史	×	×	×	×
アブールアッパース『諸国の諸情報』 アーリー『統治の諸部』『諸情報の精髓』	1598/9年 16世紀末	不明 書記	不明 不明	世界史 世界史	×	×	×	○ ×